ゐのはな
千葉大学医学部同窓会報　第98号　題字　鈴木五郎

編集発行者
千葉大学医学部
ゐのはな同窓会報編集部
〒280 千葉市亥鼻1－8－1
千葉大学医学部内
ゐのはな同窓会
電話千葉（0472）22-7171内線2038

教授就任の挨拶

千葉大学医学部附属病院
卒後・生涯医学臨床研修部
若新政史（昭和38卒）

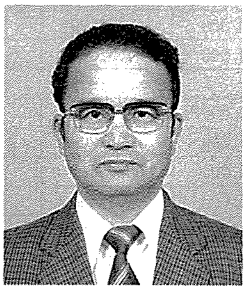
平成二年二月一日付で附属病院卒後・生涯医学臨床研修部の教授に就任しました。これは文部省が本腰を入れて創設した全く新しい部門で、教授就任は本学が最初であります。私自身不安を隠しきれぬ心情ですが、広範に各階層からの貴重なる御意見を拝聴し、真意を充分に把握しつつ推進したいと考えております。

文部省原案により現在迄に一応定められている臨床研修の対象となる専門研修医（文部省原案では登録研究医）は、医師（歯科医師）免許取得後二年以上の開業医、又は病院勤務医です。本学ではすでに病院の中に委員会が設立されており、病院長を中心に二年余に亘って討議が重ねられ、すでにカリキュラムの概要が作られ、二十九診療科、六十八のコースが用意されています。研修は週一回程度となっています。現在十六名の研修医の方々が研修に従事し、平成二年四月一日より更に数名が研修を希望しています。

この専門研修部の基本の理念は大学の門戸開放にあり、飛躍的に進歩する現代医学と、一般開業医病院勤務医のギャップを埋めようとするものです。現実には、すでに、理想との谷間で解決せねばならない難問が山積みにされています。欧米等先進国の現状を知ることも大切であり、また日本の現況に合う様なシステムを徐々に模索していき度いと考えております。

いずれにしても、大役をお引き受け致しましたが、諸先生方の多大な御支援なくしては何も出来ません。宜しく御指導、御鞭撻の程お願い申し上げます。

千葉大学医学部公衆衛生学教室
安達元明（昭和38卒）



この度、平成二年六月十六日付をもって、公衆衛生学講座を担当することになりました。初代柳沢利喜雄教授、二代目吉田亮現学長に次ぐ三代目として、その責任の重大さを痛感しております。

当講座は昭和二十八年に創設されました。初代柳沢教授は、寄生虫、特に鉤虫の予防撲滅を初め、成人病対策、農村保健に、二代目吉田教授（昭和四十三年就任）は、日本経済の高度成長期にあたり大きな社会問題であった公害問題－特に大気汚染の生体影響を疫学的および実験的に追求、また医療の問題にも取り組むなど、いずれも時代の要求に応えた問題を研究テーマに多大の功績を残されました。

私は、昭和三十八年に本学部を卒業、四年間小児科学教室に在籍後、四十三年より吉田教授の指導のもとで、公衆衛生学を学んで参りました。

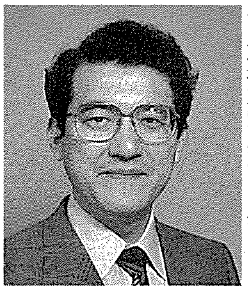
最近地球規模での環境汚染が問題となっています。しかし、これも今までの数多くの地域汚染の集積として起こったものです。従って、地域の環境問題を引き続き追求していく所存です。

人口の老齢化、疾病構造の変化にともなう国民医療費の増大などにより、これからは今まで以上に予防の重要性が認識されるものと思われます。健康管理、地域医療システムなど、広く社会の要請にも応えねばならないと考えます。

高度情報化時代を迎え、千葉大学の情報システムの整備にも及ばずながら微力を尽くしたいと思っております。

今後とも、宜しく御指導、御鞭撻の程をお願い申し上げます。

富山医科薬科大学附属病院和漢診療部
寺澤捷年（昭和45卒）



平成二年一月一日付で富山医科薬科大学附属病院・和漢診療部の教授に昇任致しました。

富山医科薬科大学和漢診療部は昭和五十四年の附属病院開設と共に設けられた中央診療施設でありまして、当時、第二内科の教授であられました熊谷朗先生のご推薦と、恩師奥田邦雄・大谷克巳・平山恵造の諸先生のお力添えにより赴任させて頂きました。

富山医科薬科大学には同門の片山喬医学部長（三十年卒・泌尿器科）、窪田靖夫教授（二十八年卒・眼科）、辻陽雄教授（三十三年卒・整形外科）がおられ、この十年間、終始変わらぬご支援とご指導を賜りました。この紙面をお借りして厚く御礼を申し上げます。

和漢診療学はわが国の伝統医学を基礎とした総合的診療をめざす学問体系であります。東洋医学の治療理念を近代医学の成果を動員して再編し、あらたな治療学の形成を計ることを目標としております。この様な臨床研究機関は国立大学では本学のみで、文部省当局もその試みに多大な関心を寄せております。

幸い、入局希望者も多く、現在、千葉大学東洋医学研究会のOB五人に本学の卒業生が加わり総勢四十五人を数えております。研修システムとしては伝統医学の修得とともに内科学の研修も併せて行なっておりますが、内科学の研修に当たっては鹿島労災病院、成田赤十字病院、旭中央病院、熊谷総合病院、松戸市立病院、清水厚生病院など、千葉大学の関連病院の諸先生方にご指導頂いており、ここに、厚く御礼を申し上げる次第であります。

新たな学問体系の確立のために教授就任を機に一路邁進したいと存じますので、何卒今後とも宜しくお願い申し上げます。

速報欄

ゐのはな同窓会新役員

平成三年の新役員が決定した。

会長　名尾良憲（昭和13卒）
副会長　井出源四郎（昭和19卒）
貫洞一夫（昭和22卒）
渡辺武（昭和27卒）
常任理事（学内）
事業　岡本昭二（昭和27卒）
庶務　大藤正雄（昭和29卒）
会計　磯野可一（昭和33卒）
会計　清水文七（昭和33卒）
庶務　新美仁男（昭和33卒）
事業　嶋田裕（昭和37卒）

会計報告

平成元年度 決算報告

A．収入の部

科目	予算額	年度末収入計	差引高
財産収入	850,000円	1,767,780円	917,780円
会費収入	6,200,000	5,121,000	△1,079,000
事業収入	0	296,000	296,000
寄附金	100	152,645	152,545
繰入金	0	0	0
繰越金	5,511,023	5,511,023	0
収入計	12,561,123	12,848,448	287,325

B．支出の部

科目	予算額	年度末支出計	差引高(△減)
1．事業費			
会報発行費	700,000円	232,960円	△467,040円
名簿発行費	800,000	721,618	△78,382
新会員歓迎費	300,000	300,000	0
顕彰奨学金	200,000	200,000	0
慶弔費	100,000	45,950	△54,050
支部連絡費	300,000	70,000	△230,000
小計	2,400,000	1,570,528	△829,472
2．事務費			
備品費	300,000円	0円	△300,000円
消耗品費	400,000	64,523	△335,477
通信印刷費	2,200,000	1,511,696	△688,304
振替手数料	150,000	120,280	△29,720
会議費	100,000	3,790	△96,210
諸手当費	2,500,000	2,353,338	△146,662
退職金引当金	105,000	105,000	△0
謝金費	400,000	128,372	△271,628
小計	6,155,000	4,286,999	△1,868,001
3．予備費			
基金繰入額	3,000,000円	3,000,000円	0円
予備費	1,006,123	150,660	△855,463
小計	4,006,123	3,150,660	△855,463
支出計	12,561,123	9,008,187	△3,552,936
繰越額		3,840,261	

基金　33,000,000＋3,000,000＝36,000,000円

退職金積立金　105,000円

平成2年度 予算案

A．収入の部

科目	予算額	前年度予算額	差異	備考
財産収入	3,300,000円	850,000円	2,450,000円	
会費収入	6,200,000	6,200,000	0	2,000円×3100名
事業収入	0	0	0	
寄附金	100	100	0	
繰入金	0	0	0	
繰越金	3,840,261	5,511,023	△1,670,762	
収入計	13,340,361	12,561,123	779,238	

B．支出の部

科目	予算額	前年度予算額	差異	備考
1．事業費				
会報発行費	700,000円	700,000円	0円	
名簿発行費	0	800,000	△800,000	
新会員歓迎費	300,000	300,000	0	
顕彰奨学費	200,000	200,000	0	
慶弔費	100,000	100,000	0	
支部連絡費	300,000	300,000	0	
小計	1,600,000	2,400,000	△800,000	
2．事務費				
備品費	300,000円	300,000円	0円	
消耗品	400,000	400,000	0	
通信印刷費	2,500,000	2,200,000	300,000	
振替手数料	150,000	150,000	0	
会議費	100,000	100,000	0	
諸手当費	2,500,000	2,500,000	0	
退職引当金	105,000	105,000	0	
謝金費	400,000	400,000	0	
小計	6,455,000	6,155,000	300,000	
3．予備費				
基金繰入金	3,000,000円	3,000,000円	0円	
予備費	2,285,361	1,006,123	1,279,238	
小計	5,285,361	4,006,123	1,279,238	
支出計	13,340,361	12,561,123	1,779,238	

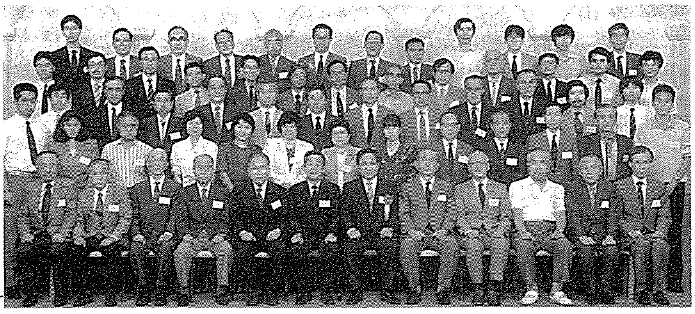
基金　33,000,000＋3,000,000＝36,000,000

退職引当金　105,000

各地ゐのはな会だより

神奈川ゐのはな会

ご存じの様に、当地区には、横浜、川崎があり、また、国立横浜東病院、国立横浜病院、小田原市立病院、横浜市立大学、北里大学、聖マリアンナ医科大学、東海大学、昭和大学藤ケ丘病院などが所在する事もあって、会員総数は総員三百二十七名（平成元年六月現在）の大所帯であります。全体を七地区に分け、そりぞれに地区幹事を置き、この六月には会員名簿の整備をも行い、きめ細かな連絡のもとに事をなすようにしており、また、今年中には、昨年より準備中の神奈川ゐのはな会の会報も発行の予定であります。



平成元年七月八日(土)にホテル・リッチ横浜で行った、平成元年度の総会、および、懇親会には、昭和十五年卒の稲村徳、田中洋両先生から、昭和六十三年卒の川居重信先生まで、広い世代にわたっての出席者五十八名に加え、昨年度から行っている在校生の招待には、塚越芳久、湯浅譲治、渡辺桂子、増田公男、市来真彦、加藤佳瑞紀の諸氏6名も参加、本部からは第一内科・大藤正雄教授のお出でを頂き、千葉大学の近況、また、いわゆる「高度水準医療の現況」、千葉大学病院におけるそれへの対応状況などの御講演を賜り、極めて盛会でありました。

診療面での連携・連絡と共に、種々の同好会なども企画している昨今であります。

（野呂忠慈記）

支部会　富田　裕（昭30）
副支部長　小林　賢（昭30）
総務理事　高橋柳子（昭32）
　野呂忠慈（昭34）
会計理事　森　豊（昭37）
地区幹事
川崎地区　三十七名
竹内志郎（昭18・専）
松尾成久（昭29）
横浜地区　百四十一名
天野勝弘（昭41）

県央地区　五十名
　横山哲夫（昭34）
横須賀地区　三十五名
　関尾秀一（昭20）
　青木太三郎（昭28）
湘南地区　十五名
　矢野柾多（昭34）
　原紀道（昭38）
西湘地区　三十四名
　福田淳（昭41）
平塚・大磯・二宮地区　十五名
　佐藤昇一（昭24）
　津田康之（昭25・専）
会計監査　青木太三郎（昭28）
事務局：
〒二三六　横浜市金沢区泥亀
　二―八―三　金沢病院内
　神奈川ゐのはな会
　（担当　西山美矢子）
TEL：
〇四五―七八一―二六二一（内八四）

群馬ゐのはな会

平成元年十二月八日、マーキュリーホテルに於てゐのはな会群馬支部総会を催しましたところ、皆々様には年末年始御多忙にも拘らず二十二人の御参加を頂きました。今回の御案内は名簿により七十五通差し上げましたが、六十二通の返信があり、七十二人の現勢力であることが確認できました。会員諸氏が県下各地方面に亘って御活躍することにより、本支部が群馬の健康福祉増進に貢献するところとなること必定と存じます。

当日は、狭心症発作に倒れる迄本支部を盛り立て存続を計られた矢端秀男先生（昭9卒）前会長の名誉会員推薦を全会一致で決めました。又、会員の家族や縁故者の同伴出席を可能にし（当日も会場迄夫人家人の送迎あり）会員相互の友好懇親を更に深め易い運営にすることを諒承してもらいました。

前年度迄の会計報告は御承認頂き、副会長には井上清先生に加えて沖眞澄先生に御就任頂き、又いつも御出席下さる橋本五郎先生に監査御就任を頂きました。

御講演は、井出源四郎先生（前学長、ゐのはな会副会長、日中友好病院最高顧問首席）の「千葉大の現況と天安門見たまま」を拝聴させて頂きました。千葉大が東大、京大、広島大につぐスケールの大学となり、ノーベル賞受賞の利根川博士を教授陣に迎える等、母校の充実が語られました。又、彼の大講堂が建設された頃、数馬欣一（昭17卒）氏の「建物が出来ても心がなければ」との提言で、ゐのはな同窓会が整備されることになった苦心談も加えられました。何よりも、お互いに会費を疎かにしてはならない、どんぶり勘定ではいけないことも語られました。

天安門事件については次のような話がありました。田中総理、大平外相訪中の際、北京日中友好病院建設を以って、賠償金がとられなかった戦後処理の友情に応えることとなったそうです。五年がかりで、他に類のない近代建築の大病院が、北京の東里に出来上り、五年前よりオープンしているそうです。なお、井出先生は平成元年三月より六月の天安門事件に至る迄滞在した見たままも詳細にお話し下されました。一同共に北京にある思いで拝聴しました。専制政治の腐敗、情報の閉鎖社会の悲劇の歴史を今程生々しく見聞することの出来たことはないと存じます。

井出先生の熱弁に皆引き入れて御馳走を味合うひまもない程でした。記念撮影の方はボーイにシャッターを切らせた訳ですが、EOSの性能が十分に発揮されず、掲載のような出来の写真となってしまいました。

世界の歴史の革命的大変動の一年を過そうという時、我々開業医を見ましても、優遇の名の下に天下の攻撃の矢面に立たされています。お互いにガッシリとスクラムを組まねばなせない時と存じます。

［会長　平形義人（昭19卒）　記］

山形ゐのはな会

去る平成2年2月23日、山形市内の料亭において第二一回山形ゐのはな同窓会が開催された。

本会は昭和51年10月に山形大学医学部付属病院が開院し、麻生和雄皮膚科学教授（昭24卒）、荒井宏朋公衆衛生学教授（昭30卒）、十東支朗精神神経医学教授（昭30卒）、白井敏雄第二解剖学教授（昭31卒）など、千葉大学の同窓生が一挙に増えたのを機会に、それまで山形県内におられた先生方に呼びかけて、第一回ゐのはな会山形支部の会として昭和52年5月に開催されたのが始まりである。発足当時の会員数は18名であったが、会員に吉田良夫先生（昭19卒）、副会長に麻生和雄先生を選び、昭和54年には会の正式名称を山形ゐのはな同窓会とし、会則、名簿を作成し、年1回の定期総会のほか、庄内で臨時総会を開くなどして小規模ながら和気あいあいとした雰囲気の中で続けられ、会員数は一時は32名にまで増加した。しかしその後、高齢の先生方の逝去、大学関係の先生方が次々に関東地方へ戻られる状態が続き、平成元年には会員数21名となり、総会の出席者もここ数年は10名前後という状態が続いていた。しかしこの度山形大学医学部泌尿器科学教授として中田瑛浩先生（昭38卒）が赴任され、その歓迎会を兼ねた今回の総会には13名の出席が有り、久しぶりに華やかな会合となった。

これを機会に山形ゐのはな同窓会が益々発展していくことを期待したい。

〔灘岡寿英（昭48卒）　記〕

首都圏産婦人科ゐのはな会

ゐのはな同窓会会員で、首都圏に在住する産婦人科医の有志の会。

一九八五年に発足、平成二年四月二十一日、第八回例会をオークラスカイレストランで開催した（写真）。東京女子医大中林正雄教授（昭43卒）の「母体死亡の現状と対策」講演後、中華料理を賞味しながら懇談した。

当会の目的は、首都圏大学の産婦人科教授、助教授、講師との交流を通して卒後研修を行う。また、会員相互の親睦を図る。第1回から7回までの講師は、小林充尚防衛医大教授（昭23卒）、加藤宏一防衛医大教授（昭34卒）、天神美夫杏雲堂副院長（専23卒）、永田一郎防衛医大助教授（当時）（昭35卒）、関谷宗英千大助教授（昭40卒）、永田一郎防衛医大教授、中林正雄東京女子医大教授。

会場は第五回までホテル・オークラの桃花林だったが、第六回からは例会場を新宿の野村ビル四十九階のオークラスカイレストラン「桃里」に移し、一時間の教育講演を聴いたあと、グルメディナー懇親会二時間というスタイル。出席者は二、三十名というところ。会長は落合和雄先生（昭18卒）で、村瀬靖（昭30卒）と私が幹事役で運営し、会報も発行している。

催会の案内は、同窓会名簿から抽出した首都圏在住の産婦人科医へ郵送しているが、案内洩れの方も多いと思われる。案内希望の方は私（☎〇五五九・二二・〇八〇〇望月産婦人科医院）までご連絡を。開催は年に一、二回、入会金、年会費などはない。

教育講演は実地開業医に有意義で、さらに、中華料理はなかなかの味。オークラ「桃花林」の味には及ばぬものの、食にうるさい人も満足できよう。

〔望月良夫（昭30卒）記〕

◇◇◇　◇◇◇　◇◇◇

退官記念式典開かれる

平成二年三月で定年により千葉大学医学部を去られた木村康夫先生（法医学）、久我哲郎先生（高次機能制御研・高次神経分野）、加藤巌（微生物学第二）に対する記念式典と記念講演会などが挙行された。

木村　康教授（昭和24卒）

法医学講座木村康教授は三十八年間在職された千葉大学を平成二年三月末日をもって停年退職され、千葉大学名誉教授となられました。

これにさきだって、二月六日（火）午後二時四十分より医学部大講堂において「裁判と鑑定」と題する最終講義が学生ほか学内外多数の方々の御出席の下に行われました。携われた多数の鑑定例のうち東山事件を初めとする損傷、血痕に関する三件の鑑定例について成傷器、外力の方向の推定、血痕の検査方法など、鑑定の結論を導く考察の順序、方法について詳しく述べられ、「鑑定は自信をもって行なうことができたが、それには多くの例について経験を重ねていたことによるものであり、自信をもってことにあたるにはそれだけ経験を積むことが必要である」と講義をしめくくられ、出席者に深い感銘を与えました。

次いで、三年十七日午後二時より御一緒に退官される微生物第二講座加藤巌教授、高次機能制御研究センター高次神経分野久我哲郎教授との三教授合同の医学部主催の退官記念式典が附属病院第一講堂で行われた。式典は村山医学部長の挨拶にはじまり、吉田学長、小林名誉教授代表、井出同窓会長代理、吉川微生物学第二同門代表、湯本法医学同門代表、佐藤高次神経分野同門代表よりそれぞれ祝辞が述べられ、微生物学第二野田、法医学木内、高次神経分野渡辺がそれぞれ三先生に謝辞を述べ、記念品贈呈、花束贈呈のあと、退官される三名の先生が挨拶されました。

次いでTBS元部長アナウンサー榎本勝起氏の「魅力の人生賛歌」と題する話術の巧みなユニークな記念講演が行われました。

ひきつづいて、病院第三講堂において記念祝賀会が行われました。岡本附属病院長の挨拶、桑田名誉教授代表、近藤教授会代表の祝辞のあと、佐藤甫夫教授の乾杯の発声で開宴され、三教授は多くの出席者に囲まれて和気あいあいのうちに会を終了しました。

この様に記念行事を滞りなく行うことが出来ましたのは世話人会の先生方をはじめ関係の方々のお陰と教室員一同心から御礼申し上げます。

千葉大学医学部法医学講座教授
木内政寛（昭和39卒）

久我哲郎教授（昭和24卒）

高次機能制御研究センター高次神経分野教授久我哲郎先生は、平成二年三月末日をもって三十六年間在職された千葉大学を停年により退官され、千葉大学名誉教授となられました。久我先生は腐敗研究所教授、生物活性研究教授及び同研究所所長、医学部付属脳機能研究施設教授、及び高次機能制御研究センター教授を歴任されるなど学内外で広く活躍されました。

退官に先立ち二月十六日（金）午後二時四十分より医学部第一講義室において「シナプス伝達とともに—横隔膜より非アドレナリン・非コリン作動性反応まで—」と題する最終講義が学二の学生をはじめ多数の方々の出席のもとに行われました。講義は薬理学教室当時の横隔膜神経筋標本による研究の回顧にはじまり、平滑筋神経叢内の未知の伝達質の探索にまで及びました。淡々とした語り口で話される高度な内容の講義は、聴く人に深い感銘を与えました。

今年度は、久我先生と法医学講座の木村　康、微生物第二講座の加藤　巌先生がご一緒に退官されたので、医学部主催の退官記念式典は三教授合同で三月十七日（土）、午後二時より附属病院第一講堂でとり行われました。

式典は、本田良行教授の司会ですすめられ、村山　智医学部長のご挨拶につづき、吉田　亮学長、小林龍男名誉教授、井出源四郎同窓会副会長、同門代表の祝辞が寄せられ、各教室の助教授により先生方への謝辞が述べられました。

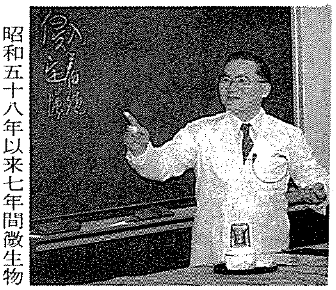
ついでTBS元部長アナウンサー　榎本勝起氏の「魅力の人生讃歌」と題する記念講演が行われました。

記念式典につづいて附属病院第三講堂において記念祝賀会が行われ、三教授は多くのご出席の方々に囲まれ長年の労をねぎらわれ、和気あいあいのうちに記念式典および祝賀会を終了しました。

このように退官記念事業を滞りなく行うことが出来ましたのは、世話人会をはじめとする関係者の方々のご厚情の賜物で、教室員一同心からお礼申し上げます。

千葉大学医学池高次機能制御研究センター高次神経分野
助教授　渡辺由雄（北大昭38卒）

加藤　巌教授（北大昭25卒）



昭和五十八年以来七年間微生物学第二講座を主宰された加藤巌教授は、平成二年三月末をもって停年退官されました。

これに先立ち二月十四日（水）、医学部大講堂において、「細菌毒素の医学・生物学への応用」と題する最終講義が、学一の学生をはじめ学内外の多数の方々のご出席のもとに行なわれました。講義は細菌感染と細菌が産生する毒素との関係をはじめとして、研究や人生に対する心情を独特のユーモラスに語り口で話され、名句を混えた多くの示唆に富むものであったため、聴く人に深い感銘を与えました。

次いで三月十七日（土）には、ご一緒に退官されることになった法医学講座木村康教授、高次機能制御研究センター久我哲郎教授との医学部主催、合同記念式典が附属病院第一講堂に於いて厳かにとり行なわれました。式典は村山智医学部長のご挨拶にはじまり、吉田亮学長、小林龍男名誉教授、名尾良憲同総会長代理井出源四郎同副会長のご祝辞が、また微生物学第二講座からは吉川昌之介同門代表のご祝辞と教室代表野田の謝辞がありました。

つづいてTBS元部長アナウンサー榎本勝起氏の「魅力の人生讃歌」と題する記念講演が行われました。

記念式典につづき附属病院第三講堂で記念祝賀会が行われ、三教授は多くのご出席の方々に囲まれ、長年の労をねぎらわれ、和気あいあいのうちに滞りなく記念式典および祝賀会を終了しました。

千葉大学医学部
微生物学第二講座教授
野田公俊（東大院昭58卒）

編集後記

ゐのはな同窓会報の発行が大変遅れています。この遅刊については、会員の皆様に深くお詫びします。

永い間この会報の編集に携わっておられた解剖学第三講座の徳永叡助教授が岡山大学教授にご就任になったあと、村山智教授、鈴木信夫助教授が会報の編集に当たられてきました。その間に、ゐのはな同窓会の事務室の今泉さんが退職されて、黒木さんに交替するなど、いろいろな事情が入れ込んで、会報の発行が遅れました。

今後、会報の編集のための組織を再検討して、ご期待に添いたいと思っております。（岡本昭二）